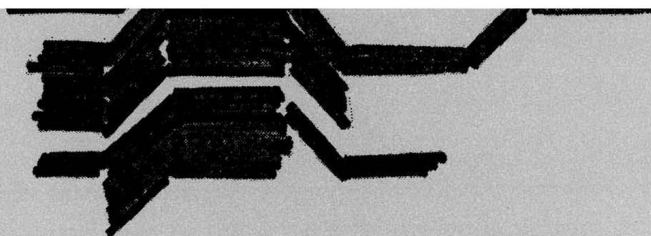


創造的塚本邦雄論

安森敏隆





創造的塚本邦雄論 安森敏隆

安森敏隆（やすもり としたか）

1942年，広島県生まれ。

立命館大学大学院文学研究科修士課程修了。

梅光女学院大学教授。

「異境」「玲瓏」「胃炎」会員。

著書 歌集『沈黙の塩』（1979年，新風土社）

評論集『斎藤茂吉幻想論』（1978年，桜楓社），

『抒情の軌跡』（1983年，書肆季節社）など。

創造的塚本邦雄論

1987年7月25日 第1刷発行

定 価 1800円

著 者 安森敏隆

発行者 宮永捷

発行所 有限会社而立書房

東京都千代田区神田神保町1丁目20番地

振替・東京9-174567／電話 03(291)5589

印 刷 文栄印刷株式会社

製 本 大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。 1095-0933-3359

© Toshitaka Yashumori, Printed in Tokyo, 1987

目次

第一章 創造論

第一節 「木槿」の位相 6

第二節 「メトード」の位相

第三節 『水葬物語』の位相 53 27

第二章 構造論

第一節 言語の位相 68

第二節 文体の位相 75

第三節 喩の位相 87

第三章 幻想論

第一節 父の位相 108

第二節 神の位相 117

第三節 幻想の位相 133

あとがき

171

初出誌一覧

173

塚本邦雄短歌索引

175

装訂・政田岑生

創造的塚本邦雄論

第一章 創造論

第一節 「木槿」の位相

一

岡井隆に「アララギ」の習作期があり、山中智恵子に「日本歌人」の少女期があったように、塚本邦雄においては、杉原一司と短歌の「方法」を模索した同人誌「Methode」がそれに相当すると考えられていた。「Methode」の創刊にあたる一卷一号（昭和24年8月10日発行）には、杉原一司の評論エッセイ「方法の位置——やさしい短歌論」に並んで、次のような塚本邦雄の「アルカリ歌章」が一面を飾っている。

アルカリ歌章

A

赤い旗のひるがへる野に根をおろし下から上へ咲くジギタリス

賈札の類かららかに街を流れ野にながれ暗い夕日にひびき

淡水の潮とまじはる河渉り旅人ら麦の種子をもとめき

廃港は霧ひたひたと流れよる今宵幾たり目かのオフエリア

炎天の河口に流れるものを待つ晴朗な偽ハムレット

ここには従来短歌（昭和二十四年以前）の〈素材〉と〈私〉と〈詩〉の範疇をはるかにこえた三十一音の羅列がある。〈素材〉的には、「オフエリア」や「ハムレット」さらにこの連作B、Cでは「アルカリの湖底」「コスモポリタン」「レダの靴」などがうたわれており、日本の風土や社会や日常といったところに素材をもとめていた従来のものに比べ、まことに異質なものであった。また、一首一首の背後にびったりとくっついていいるはずの日常形而下的な作者の〈私〉もここではなまのかたちで一切登場せず、これら一連の背後のトータルな認識者として登場するのみである。また、それにともない一首一首の〈詩〉の質も従来の抒情とはまったく違った音色を奏でているのである。だが、このタブロイド判の同人誌「Méthode」は昭和二十五年の二月までに七号出ただけでほとんど黙殺されてしまい、世評にのぼることも喧伝されることもなかった。さらに、これらの歌を含め、昭和二十六年八月刊行された第一歌集『水葬物語』（メトード社）は今日では有名すぎるほど有名になったが、当時は百二十部限定刊本であり、人口に膾炙されることはあまりなかった歌集である。昭和三十年代にはいつて、前衛短歌運動の台頭とあいまって塚本邦雄は次々と新しい歌をつくり歌集を刊行してゆくことになる。第二歌集『裝飾楽句』（作品社、昭31・3）、第三歌集『日本人霊歌』（四季書房、昭33・10）、第四歌集『水銀伝説』（白玉書房、昭36・2）、第五歌集『綠色研究』（白玉書房、昭40・5）、第六歌集『感幻楽』（白玉書房、昭44・9）、第七歌集『星餐図』（人文書院、昭46・12）、第八歌集『蒼鬱境』（湯川書房、昭47・8）、第九歌集『青き菊の主題』（人文書院、昭48・10）、第十歌集『されど遊星』（人文書院、昭50・

6)である。

第十歌集を出した昭和五十年の十一月になって、実は昭和二十六年にはじめて刊行された処女歌集『水葬物語』以前につくられた未発表、既発表の作品をまとめて未刊歌集『透明文法』（大和書房、昭和50・12）と命名して刊行するのである。その「跋文」には、その間の事情が次のように書かれている。

「杉原一司に献じた『水葬物語』は、彼と相見えた時からその死に到る約二年間の作品を収録してゐた。すなわち、同人誌『メトード』初出の作品群を編輯構成したものである。それ以前の夥しい試作を潔く切捨てることによつて彼に殉じ、暗中摸索の過去は葬る決意であつた。過去は葬つたが、その時保留した未来が私に以後二十余年作品を書き続けさせる結果を生んだ。杉原に殉ずることを、短歌、定型韻文詩ひいては文芸と共に生きることになつたと言ふべきだらうか。

切捨てた作品は、私が戦後廢墟に歌人として目覚め、ほとんど孤立無援の状況下に、ひそかに、しかし烈しい敵意に燃えて書き継いできたものであり、中には歌誌『オレンヂ』（後『日本歌人』）、『青櫨』、同人誌『くれなゐ』に発表したものもまじへてゐる。未知の杉原が作品によつて私を認め、ただ一人の盟友と想定しはじめたのもこの期間であつた。私も亦彼が『オレンヂ』や同人誌『花軸』に発表する作品や試論に、稀なる念友の志を酌みとつた。」

すなわち『水葬物語』に収録されているもつとも初期の作品とおもわれていた「メトード」の初出作品以前に、「オレンヂ」（後「日本歌人」）や「青櫨」や「くれなゐ」に発表されていた作品があり、

「私が戦後廃墟に歌人として目覚め、ほとんど孤立無援の状況下に、ひそかに、しかし烈しい敵意に燃えて書き継いできたもの」の中から三百首を選んで、未刊歌集『透明文法』と名づけて上梓したのである。塚本邦雄はすでに昭和十九年十一月に「潮音」の流れをくむ「青櫓」に参加し、毎月作品を発表しており、戦後すぐには「オレンヂ」に参加し、その後「日本歌人」に作品を発表したり、昭和二十二年から二十三年にかけては大阪を中心に二十代ばかりの若い人があつまってつくっていた「くれなる」にも参加し、短歌を創り発表していたのである。

ところが、実は塚本邦雄にはもともとそれ以前において「木槿」時代の習作期が厳存していたのである。政田岑生の作成した「塚本邦雄年譜」(『国文学』昭51・1)と同「年誌」(『定本 塚本邦雄湊合歌集』)『別巻』所収)をみると、昭和十七年に「幸野羊三主宰歌誌『木槿』」に入会、断続的に作品を発表」という項と、昭和十九年の「大阪の歌誌『青櫓』」に参加、毎月作品を発表、同人となる」という歌誌参加の項がみえるものの、この期の塚本邦雄の歌そのものについてはあまりふれられていない。

今のところ二、三の単発的な論考があるのみで、塚本邦雄のこの期の歌の経歴はエア・ポケットになっている。この期、塚本邦雄はなんと二百八十八首の歌を「木槿」に投稿し、きたるべき短歌革新のために新しい「方法」を模索していたのである。

昭和五十九年五月二十七日、塚本邦雄は四十年ぶりに呉の地に来て「初心忘るべし——わが短歌入門——」と題して二時間にわたって、昭和十八年から二十三年にかけて入っていた短歌雑誌「木槿」の時代の歌と人について話し、自らこの期のエア・ポケットの部分を開顕してみせてくれたのである。その中で次のように語っている部分は、氏のかつての思考をアマルガムしたものとしてみえてリアリティを

もってひびいてくる。

『木槿』は私にとつての初心である。けれども、私が生涯消すことのできない『汚点』と考えているのは、大変不遜な考えかも知れません。誰にでも、幼年期、揺籃期というものはある。それは、免れ難い人間の業(ごう)じゃないかと思ひます。そう思ひつつも、この『木槿』の昭和二十二年以前の初出作品群が、一切消えてなくなればいいと考えたことすらあります。もしも、それが古書店にでも出れば全部買ひとつて焼き捨てたいと思つたくらいです。いまでもそういう気持はかすかにあるんですけれども、今度読み返してみても、妙に開き直つたような気持も生れました。仮に、今日の作が一応完成度の高いものとすれば、落差の甚しい初期作品は、まずければまずいほど、私の努力のあとがはつきりする。変化の様子がきわだつ、歓迎すべきことだらうと。」

ここには、第一歌集『水葬物語』から当時、第十四歌集『豹変』(大和書房 昭59・8)を刊行しようとしていたひとりの歌人としての自信と孤高の聲がかくされていることをのがしてはならない。

『木槿』は昭和九年(一九三四年)四月に、幸田幸太郎(本名・森野数夫)が発行者となつて第一巻第一号を出している。そして、そのすぐあと「潮音」の同人、幸野羊三(本名・塩崎直幸)が入社すると幸田幸太郎は補佐役となり、そのかわり幸野氏が以後、昭和二十一年十月に死去するまで主宰者となつて実質的に「木槿」を呉の地においてひっぱつてゆくのである。塚本邦雄が「木槿」に参加した昭和十八年当時、広島には「晩鐘」や「真珠」や「言霊」という有力な歌誌があつた。また、呉には

「木槿」の他に「石楠」という歌誌もあったが、「どうやら『木槿』の方は歴然と太田水穂系の雑誌らしい。だが『石楠』はよくわからない、君が確かめてごらんといって見せてくれました。そこには、万葉調の、勤王の志士の歌のような不思議な格調のある作品がずらりと並んでいました。どうもこちらには肌に合わないようだから。潮音系とかいう『木槿』の方へ歌を出して見ようかと思いました」(「初心忘るべし」ということで、昭和十八年から二十三年にかけて「木槿」にはじめて作品を発表していくのである。

塚本邦雄の「木槿」への作品発表をまとめて表にしてみると次のようになる。

回	項	巻 (月)	号	発行年月	作 品 名 (欄)	歌数	発表頁
1		第十卷 第五号		昭18・5・25	無題 (詠草欄)	8	9
2		第十卷 第七号		昭18・7・31	無題 (詠草欄)	5	8
3		第十卷 第八号		昭18・8・25	無題 (特別社友詠草欄)	5	10
4		第十卷 第九号		昭18・9・25	無題 (同人短歌欄)	4	3 3 4
5		第十卷 第十号		昭18・10・25	無題 (同人短歌欄)	5	3 3 4
6		第十卷 第十一号		昭18・11・25	無題 (同人短歌欄)	5	3
7		第十一卷 第一号		昭18・12・25	無題 (同人短歌欄)	5	1 1 2
8		第十一卷 第二号		昭19・2・1	無題 (同人短歌欄)	8	1

23	四月号 (通卷一三三号)	昭22・3・25	饒舌	7	5 5
22	二月号 (通卷一三四号)	昭22・3・10	華やかな嘘 (木槿集)	10	7 8
21	一月号 (通卷一三二号)	昭22・1・25	転身の冬 (木槿集)	9	1 2
20	十一・十二月合併号 (通卷一三一号)	昭21・12・25	一穂の草 (木槿集)	8	7 8
19	九・十月合併号 (通卷一二〇号)	昭21・10・25	いのち (木槿集)	5	1 2
18	八月号 (通卷一二九号)	昭21・8・25	倫理 (木槿集)	4	2
17	七月号 (通卷一二八号)	昭21・7・25	あぢさゐ (木槿集)	5	2
16	六月号 (通卷一二七号)	昭21・6・25	花薔 (木槿集)	5	3
15	五月号 (第十三卷第五号)	昭21・5・25	涸れ菜	7	5
14	通卷 一二四号	昭20・6	無題	3	1
13	通卷 一二三号	昭20・5	無題	5	1
12	通卷 一二一号	昭20・4	無題	6	1
11	通卷 一二〇号	昭20・3	失明近き友 (木槿短歌欄)	3	3
10	第十一卷 四月号	昭19・4・1	無題 (同人短歌欄)	8	3
9	第十一卷 三月号	昭19・3・1	無題 (同人短歌欄)	6	1 2

塚本邦雄が「木槿」に作品を発表していた昭和十八年五月二十五日発行の第十卷第五号（通巻一九九号）から昭和二十三年九月一日発行の通巻一四二号の間において、雑誌は三十六冊発行されている。それは昭和二十年四月号（通巻一二二号）の「その二」として発行され、すでに「その一」にあ

24	五月号（通巻一三四号）	昭22・4・25	数寄なる花	11	7 5 8
25	六月号（通巻一三五号）	昭22・5・25	綺想曲	11	5 5 6
26	七月号（通巻一三六号）	昭22・6・25	アラベスク	10	1 1 2
27	八月号（通巻一三七号）	昭22・7・25	粹な祭（同人短歌）	8	1 1 2
28	九月号（通巻一三八号）	昭22・9・25	炎宴（同人短歌）	14	2 2 3
29	十月号（通巻一三九号）	昭22・10・25	假晶（同人短歌）	13	4
30	十一月号（通巻一四〇号）	昭22・11・25	非業の秋（同人短歌）	24	1 1 2
31	十二月号（通巻一四〇号）	昭22・12・25	血みどろの霜	28	2 2 3
32	一月号（通巻一四〇号）	昭23・1・25	寒光・火喰鳥（同人短歌）	13	4 4 5
33	六月号（通巻一四二号）	昭23・6・1	牡丹雪	6	5
34	七月号（通巻一四二号）	昭23・9・1	暗緑調・密月抄・転落公子（詠草欄）	14	4

たる前号で塚本邦雄の作品は掲載されているので、この号には載っていない。実質的に塚本邦雄が欠詠したのは、一回目と二回目の間の昭和十八年七月五日発行の第十卷第六号のただ一回ということになるのである。

「木槿」の巻と号の教え方はまちまちで、多少の重複や混乱がみとめられるが、掲出の表は初出のままにしておいた。

二

「木槿」昭和十八年度の巻頭には、「日本文学報国会短歌部会宣誓」の三箇条が麗々しく、つねにこの年は飾られていたことは記憶されていてよいことのように思われる。

- 一、我等ハ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼シ奉リ大東亜戦争ノ完勝ヲ期ス
- 一、我等ハ肇国ノ精神ヲ体シ短歌ヲ以テ日本文化ノ発展ニ寄与セントス
- 一、我等ハ短歌ヲ以テ国家総力戦ノ一翼タランコトヲ期ス

このスローガンを半ば信じ、かたや文学の情熱に賭けて、当時の短歌雑誌は日本各地において営々と継続されてゆくのである。塚本邦雄の短歌がはじめて載った「木槿」(第十卷第五号)昭和十八年の五月号は、次のような全体十六頁からなる小冊子で、多少の増減はあるものの前後の「木槿」もだいたいこのような構成をとり、二十頁までの雑誌であった。